

『一粒の麦の使命』 ヨハネ12:20-26

12:20 祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシヤ人がいた。

12:21 彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところに来て、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。

12:22 ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行って伝えた。

12:23 すると、イエスは答えて言われた、「人の子が栄光を受ける時がきた。

12:24 よくよくあなたがたにしておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

12:25 自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう。

12:26 もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう。

●序論

「使命」という言葉、重大な任務やとても大切な働きという意味です。

この漢字を分解すると、「命を使う」に値する意味ある勤めということになるでしょうか。

命というと、あまりにも深刻になりそうですが、わたしたちに与えられている時間やチャンス、…そういったものを捧げてでも成し遂げるに値する任務や勤めを、自分の人生で見いだすことができれば感謝ですね。きっと、その使命に生きることで、わたしたちの人生は生きがいみちたすばらしいものとなるでしょう。

ただ、それは偶然見いだすものではなくて、あなたをつくり愛する神さまとの歩みの中で見いだすものであれば幸いです。

この神さまは、わたしたちのすべてをよく知っていてくださるからです。すべてを「恵みとゆるし」で覆って、大切な気づきを与えてくださり、また導いてくださいます。

先日、能登半島の珠洲のところにボランティア活動に行きました。そこで、一人のクリスチャン男性の体験談を聞きました。

彼はその被災体験の中で絶望を感じ、「神よ、なぜ俺を裏切った！」と叫んだといひます。

しかし、そのあと奇跡的に家族が守られていたこと、そのあと続く様々な出会いや奇跡を経験して、彼は神さまの守りを経験していったといひます。

そして今、彼は自分と自分の店を解放して珠洲の街の復興のため、福音を伝える場所として提供しています。これもまた神さまからいただいた使命に生きる一歩を踏み出しています。

今日読んだところでイエスさまはこういう風にわたしたちを招いてくださっています。

12:26 もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう。

神さまにお仕えする。神さまのために、自分ができる事をしていく。お祈りで、お話しで、賛美で、そして心で…。それぞれが自分らしく神さまにお仕えして欲しいと思います。

イエス様はそんな皆さんがそこにいるならば、「父（神さま）は、その人を大切にしてください」とはっきり言ってくださっています。すばらしい祝福の言葉だと思います。

●本論

I. 栄光を受ける「時」について

イエス様が「ご自分の時が来た」ことを宣言されたのはこの時が初めてです。これまで、何度も「自分の時はまだ来ていない」と何度もそのように弟子たちに伝えていました。

しかし、今日、イエスさまは、言われました。

12:23 …「人の子が栄光を受ける時がきた。」

この時を皮切りにイエス様は「ご自分の時」、「栄光を受ける時」まさに特別な時が来たと言われ、繰り返すようになったのです。

この特別な時は、皆さんもご存じのように十字架での受難の時です。

さて、イエスさまがそう言われたことのきっかけは、エルサレムに礼拝するために来ていた数人のギリシャ人がイエスさまに会いたいと尋ねてきたことを聞いてそれにお答えになった時であったとあります。

なぜギリシャ人の願いを取り次いだことがきっかけにそう答えられたのか、わからないのです。

一つ想像できることがあります。それはそのイエスさまとの出会いを求めてきた人たちも、こののち起こるイエスさまの十字架の受難の死を目撃したのではないか…ということです。それは目撃した人ならわかる、一般的な表現で言う「栄光を受ける」とは正反対の姿でした。明らかにユダヤ人たちの異常で執拗な悪意と殺意が向けられた末の出来事、理不尽なイエスさまの十字架のありさまでした。

そのすべてをイエスさまは「ご自分の時、栄光の時」とされていたのです。

II. 「栄光」について

:23 すると、イエスは答えて言われた、「人の子が栄光を受ける時がきた。

:24 よくよくあなたがたに言う。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら、豊かに実を結ぶようになる。

ここから、イエスさまは、「もし～ならば、～するならば…こうなる」という表現を繰り返して用いられます。

ある意味、これは、罪なき神の御子イエスさまにしか全うできない、その命の犠牲を語る、とても分かりやすいたとえです。

一粒の麦というものは、そのまま食べてしまえばそれだけのことです。しかし、もしこれを地にまけば、やがて芽を出し、そして多くの実を实らせるようになるという。

そこから、もしイエスさまが受難の道ではなく、あのエルサレム入城の際の人々の

声にこたえて、地上の王として歩むことになれば、それはそれで人々は一時的には喜びでしょう。

けれども、それでは神さまが大切にしておられた、人を永遠の滅びから救うという使命を果たすことはできない…ということになります。

一方、もしイエスさまが十字架にかかって死ぬならば、多くの人を救うことができるのです。

罪のゆえに滅びるはずだった人々が、滅びではなく命へと移されるのです。

罪のない神のひとり子が十字架で身代わりに命を犠牲にされるということは、過去の、そして今の、将来に生きる信仰者を滅びから救い、永遠に主の祝福された世界に生きる者としてくださるのです。それが神の愛に一致したイエスさまの生きざまなのです。

「人の子が栄光を受ける時が来た。よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それは…」と語るイエスさまの言葉には、人となられた神の御子が自分ではなく、人々のために罪を背負い身代わりとなって苦しみを受ける…という、強烈な覚悟とを見ることができます。

「もし～するならば」という選択できる力をもお持ちのイエスさまですが、イエスさまは十字架に歩みぬかれたのです。

Ⅲ. 「キリストに仕える」ことについて

：24 …一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

それはキリストを語るものであると同時に、キリストに倣い共に生きる私たちの生きざまに、「献身」を問いかけるようなものです。

当たり前かもしれませんが、「キリストに仕える」者のまなざしは、キリストに向いています。そしてそのことが私たちの生きざまを決めるのだということです。

なぜなら、罪は、「神さまから目をそらし、自分のために生きようとする」ところから始まり、自分が何によって満足できるかに関心が向けられるようになります。そんなの、この世の中じゃ当たり前じゃないか、…という中で、”イエスさまに目を向けて生きるクリスチャンたち”は、ある意味、だからこそ、風変わりな存在に見えるのです。

わたしたちクリスチャンの人生の中心は、自分以外のものに置かれているからです。イエスさまを中心とし、イエスさまと共に歩み、イエスさまに尋ねつつ歩むからです。

わたしたちはもはやイエスさまの十字架がなかったように生きることはできません。このイエスさまに結び合わされて生きていく、それがわたしたちの姿となるのです。

そうして今日、改めてイエスさまの語られたこの言葉を耳にし、心に留めます。

そして、「もし～ならば…なる」という、わたしたちの選択と結果を見るのです。

12:25 自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう。

12:26 もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。

う。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう。

誤解のないように、聖書はいのちを粗末にせよとは語りません。

それは、まさに自分の命を使う、神さまが自分に与えてくださっている使命に生きる…ことを示しているのです。その時、自分の命を使わず、保とうとしてただ、自分の都合の良いように人を用いたり、また自分の人生だけは傷つけない…、自分者はを守りながら、神さまに仕えよう…と思っている人は、自分の使命に自分自身を使い切る事ができないために、滅んでしまう。

逆に大胆に自分の命を使う人、人生を用いる人は、更に豊かな実を結ぶようになる…という事なのです。

そういう意味で、「イエスさまに倣い、共に歩む」ことが、わたしたちの最大の使命と言えるでしょう。

●さいごに

自分が置かれた環境、状況の中でイエスさまとの歩みを大切にすることです。

そこで「もし～ならば、〇〇しよう」という選択の声を聴くことです。

12:26 もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。

先日ボランティアに行った先の人々が経験。先ほどの一人の男性のお証を聞いても、ときに「神よ、なぜ俺を裏切った！」と叫ぶほどの絶望感を経験することがあります。しかし、そこで神さまは彼に語られ、導かれ、そして守られました。

わたしたちは、自分はクリスチャンだから…、だからわたしはもっと色々な面で祝福された者になるべきだ…と思いきこむことがあるかもしれません。

そんなとき、わたしたちのまなざしは、あの十字架で死なれたイエスさまに向いているだろうか、それとも自分に向いているだろうか…、そんなことを気づかされるのです。

霊の目でイエスさまは、痛みの中で、叫びの中で、そして悩みの中で、わたしたちを愛し、赦し、包んでくださっています。

「何ができて、できなくても、何を得ても、失っても、ただ愛されている天の父に、わたしは神の子♪」あの賛美を思い出してください。

この神さまのもとに立ち返り、目を洗い、イエスさまに向けなおして出ていくことができる者としてくださる。自分の生きている現場で、自分に死に切り、一粒の麦となることわかるようにされる。それがこの礼拝の祝福です。

そして約束されているのは、「豊かに実を結ぶようになる」ということです。

なぜなら、命と恵みの主なる神さまが、わたしたちを大切にしてく下さるからです。

…もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて（大切に）下さるであろう。（:26）